

運動への意欲を高める体育科の学習指導法に関する研究 仲間とのかかわりを深める器械運動の実践を通して

広島市立五月が丘小学校教諭 吉田昌史

研究主題設定の理由

日常生活における運動遊びの減少や精神的なストレスの増大など、児童の成育環境の変化に伴い、体力・運動能力の低下や活発に運動をする者とそうでない者との二極化が指摘されている。

このような状況の中、小学校体育科では『小学校学習指導要領解説体育編』において、今回の学習指導要領改訂の方針の一つとして

児童の発達の特性を考慮した運動に仲間と豊かにかかわりながら取り組むことによって、各種の運動に親しみ運動が好きになるようにすること。

を挙げている。

しかしながら、これまでの自身の授業実践を振り返ってみると、運動を得意とする児童は運動への意欲が高いが、運動を苦手とする児童は、運動への意欲が低く、運動する喜びを味わうことができない状況が見られた。また、児童への聞き取りから、意欲の低い児童は、技能差だけではなく、運動場面で仲間とうまくかかわれていないということから、運動する喜びを味わえていないことが原因の一つであることも分かった。これは、教師が、子どもたちのかかわりをどのように引き出して学習のねらいにせまっていくのか、かかわりをどのように質的に深めていくのかということについて、具体的な構想がもてずにいたからだと考える。

そこで本研究では、仲間とのかかわりを深めるという視点から、指導の手だてを工夫し、仲間と運動することの喜びを十分に味わわせることが、児童の運動への意欲を高めることにつながるのではないかと考える。

研究の方法

児童が仲間とのかかわりを深めることを通して、運動への意欲を高めることのできる学習指導の在り方を追究する。

研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 運動への意欲について

『小学校学習指導要領解説体育編』には、体育科の目標として、

心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。

と示されている。そして、「運動に親しむ資質や能力を育てる」については、児童が生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践していくための基礎を培うことを重視するために強調したものと位置付け、「運動に親しむ資質や能力」の一つに「運動への関心や自ら運動をする意欲」を示している。

児童は、運動が「できるようになりたい」「上手になりたい」など、達成欲求をもっている。教師は、一人一人の児童に応じて達成欲求を満たすことができるようにすることが大切である。達成欲求を満たすことができれば、喜びや満足感を味わい、「またやりたい」「もっと上手になりたい」など、運動への意欲が高まると考える。

(2) 運動への意欲と仲間とのかかわりの関連性について

岩田靖は、「『関心・意欲』というものは、子ども

の運動に対する興味や関心をできる限り大切にするという授業の前提の意味だけでなく、授業における教師の能動的な働きかけや子ども同士のかかわり合いを通して積極的に、そして豊かに育てられるべき対象としてとらえるべきであろう。」と述べている。このことから、教師の能動的な働きかけにより、仲間とのかかわりを深めることが、運動への意欲を高めることにつながると考える。

(3) 「仲間とのかかわりを深める」とは

本研究では、「仲間とのかかわりを深める」ということを、「仲間と課題を解決していく中で、意見を出し合ったり、互いに励まし合ったり、教え合ったり、よさを認め合ったりしながら、運動する喜びを共有できる人間関係を築くこと」と考え、仲間とのかかわりを深めている状態を以下の視点でとらえることとした。

- ・ 仲間と意見を出そうとしたり、受け入れようとしていたりする
- ・ 仲間と励まし合い、教え合おうとする
- ・ 仲間のよさを認め合おうとする

(4) 仲間とのかかわりを深める器械運動について

平成 11 年における『小学校学習指導要領』の改訂により、『小学校学習指導要領解説体育編』では、「器

械運動」領域において

運動に集団で取り組み、一人一人ができる技を組み合わせ、調子を合わせて演技するような活動に発展させることもできる。

という内容が新たに加えられた。また、

一人一人が自己の課題をもって自発的・自主的な工夫をしながら取り組み、仲間と互いに励まし合い、助け合って、学習を進めていくように指導していくことが大切である。

と記されている。本来、器械運動は個人的な達成型の運動としてとらえられがちであるが、集団で、一つの演技に取り組むことにより、一人一人のできる技を用いて動きを組み合わせたたり、仲間と動きを合わせることで動きの質を高めたり、仲間とともに作品を創り上げていく喜び、発表を見る楽しさや発表する緊張感や達成感などを引き出したりすることができると考える。

(5) 指導の手だてについて

「仲間とのかかわりを深める」ことを意図した授業を行うためには、前述した三つの視点に沿って、「場の設定」「教具の工夫」「教師の働きかけ」を行うことが必要であると考え。そこで、次のような指導の手だてを工夫した(表 1)。

表 1 仲間とのかかわりを深める具体的な指導の手だて

指導の手だての視点	具体的な指導の手だて		
	場の設定	教具の工夫	教師の働きかけ
仲間と意見を出そうとしたり、受け入れようとしていたりする	・ペアやグループでの演技を考える「演技の構成を考える場」を設定する。	・児童が、集団演技づくりを考える場面において、演技の構成を視覚的に確認することのできる「ホワイトボード」と「マットの使い方カード」を活用する。	・教師が、集団演技づくりを考える場面において、個々の意見に対して、意見を受容する雰囲気や安心感をもてるように、積極的に言葉かけを行う。
仲間と励まし合い、教え合おうとする	・児童がペアで、グループで、ペアグループでと互いの演技を相互評価する「見合いの場」を設定する。	・児童が練習場面において、アドバイスの視点を焦点化することのできる「技のポイントカード」を活用する。	・「一声運動」として、教師が児童に肯定的なかかわりのポイントを提示し、成功した時のほめ方や失敗したときのアドバイスの仕方を教え、積極的に言葉かけを行う。
仲間のよさを認め合おうとする	・毎授業終了時に、児童がグループの仲間のよかった点について、全体で賞賛し合う「振り返りの場」を設定する。	・「意欲面」「仲間とのかかわり」などの観点から、仲間のよかった点を記入することのできる「学習カード」を活用する。	・教師が課題に積極的に取り組んでいる児童や、仲間のよさや頑張りを認める発言や行動に対して言葉かけを行い、全体に紹介する。 ・教師が、仲間のよさや頑張りについて記述された、児童の体育日記を毎時間、授業始めに全体に紹介する。

2 授業実践と結果の分析・考察

(1) 授業実践の単元計画

広島市立 A 小学校第 4 学年を対象に「集団マット」

の単元計画を作成し、平成 17 年 11 月 4 日～11 月 29 日に授業を実施した(表 2)。

表2 単元計画

時 めあて (分)	1	2	3	4	5	6	7	8
	学習のイメージをつかむ	ペアで「同時に」という感じをつかむ	ペアやグループで「同時に」という感じをつかむ	ペアやグループで「順番に」という感じをつかむ	グループで「はじめ」「なか」「おわり」の集団演技を考える	グループで試しながら集団演技をつくる	グループで集団演技をスムーズに行う	気持ちを合わせて発表会を楽しむ
5	オリエンテーション	準備						
10	・学習のテーマ	ウォーミングアップ ・集団マット遊び ・みんなでジャンプ ・横転がり	ウォーミングアップ ・みんなでジャンプ ・横転がり	ウォーミングアップ ・透明8の字とび ・みんなでジャンプ	ウォーミングアップ ・透明8の字とび ・みんなでジャンプ	ウォーミングアップ ・透明8の字とび ・みんなでジャンプ	ウォーミングアップ ・透明8の字とび ・みんなでジャンプ	ウォーミングアップ ・透明8の字とび ・みんなでジャンプ
15	・学習の進め方	・感覚づくりの運動 ・ゆりかご ・かえるの足うち ・補助倒立 ・ブリッジなど						
20	・技の種類	ペア練習 ・できる技合わせ ・前転	ペア練習 ・できる技合わせ ・自分ができる技	ペア練習 ・できる技合わせ ・自分ができる技	ペア練習 ・できる技合わせ ・自分ができる技	ペア練習 ・できる技合わせ ・自分ができる技	ペア練習 ・できる技合わせ ・自分ができる技	ペア練習 ・できる技合わせ ・自分ができる技
25	・集団マットの演技 (VTR)		・チャレンジ技	・チャレンジ技	・集団演技づくり	・集団演技づくり	・集団演技づくり	・発表会に向けての最終練習
35	・学習の約束	グループ練習 ・決めポーズ・かけ声	グループ練習 ・後転 ・くちリズムに合わせて	グループ練習 ・側方倒立回転 ・くちリズムに合わせて	グループ練習 ・側方倒立回転 ・くちリズムに合わせて	グループ練習 ・側方倒立回転 ・くちリズムに合わせて	グループ練習 ・側方倒立回転 ・くちリズムに合わせて	グループ練習 ・側方倒立回転 ・くちリズムに合わせて
40	・学習カードの使い方	・まとめ(振り返り)						
		整理運動・片付け						

(2) 分析の方法

児童の運動への意欲の高まりを見取るために、単元前と単元終了後にアンケート調査を行った。また、仲間とのかかわりが深まっているかを見取るために毎時間授業終了後に意識調査を行った。これは、高橋健夫らが小学校高学年用に作成した「集団的・形成評価」の項目を参考に、「仲間とのかかわりについての意識調査」として作成したものである。この意識調査の結果をもとに分析する。また、児童の学習中の発言や感想もとに、「仲間とのかかわりを深める」ことを見取る規準(表3)を拠り所にして、児童を見取り、指導の手だてが有効であったかを考察する。

表3 仲間とのかかわりの深まりを見取る規準

(学習中の発言, 学習カード・体育日記の記述などを通して)
○「仲間と意見を出そうとしたり, 受け入れようとしたりする」
・「意見を出した」「意見が参考になった」「意見を聞いてくれた」「話し合えた」
○「仲間と励まし合い, 教え合おうとする」
・「ほめられた」「励まされた」「補助してもらった」「~を教えてもらった」「ほめた」「励ました」「補助した」「~を教えた」
○「仲間のよさを認め合おうとする」
・「さんが、できた」「さんが、上手になった」「さんが、~して頑張っていた」「さんが、~さんを励ましていた」「さんが、~さんを助けていた」「協力できた」「仲良くできた」

(3) 分析・考察

仲間とのかかわりを深めることを意図した指導の

手だてが有効であったかを三つの視点から分析・考察する。

ア 「仲間と意見を出そうとしたり, 受け入れようとしたりする」視点について

仲間と意見を出そうとしたり, 受け入れようとしたりすることができたかどうかを児童の意識調査の結果から分析する。

図1は、単元前・後に行った児童への意識調査のうち「体育では、グループで話し合うとき、自分から進んで意見を言いますか」の項目を取り上げて、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の割合をグラフ化したものである。グラフを見ると、単元前は「はい」と答えた児童が9名だったのに対し、単元後には26名となり、多くの児童が進んで意見を言えるようになっていくことがうかがえる。

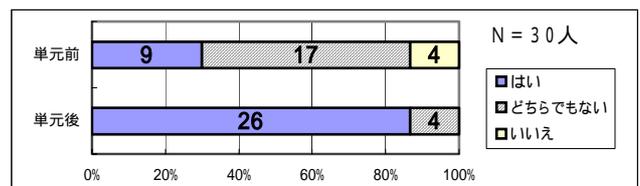


図1 「自分から進んで意見を言う」

そこで、このような結果が得られた理由を「場の設定」「教具の工夫」「教師の働きかけ」の三つの指

導の手だてから考察する。

<場の設定>

ペアやグループでの演技を考える時間を保障し、一人一人の意見が演技の中に反映されるように考えて「演技の構成を考える場」を設定した。

表4に示した児童の感想からは、仲間の意見を大切にしていこうとする姿勢がうかがえる。

表4 児童の感想

困ったことがありましたが、Sさんがナイスアイデアを出してくれました。女子は前転をするから、男子は側転をしたらいいってくれました。班がまとまってよかったです。だから、みんなが協力すれば、何でもできるんだなと思いました。
班で、口げんかみたいになっただけ、意見を大切に練習をしました。スムーズにするために、固く考えず、簡単に考えて演技をつくりました。

このことから、演技の構成を考える場を設定したことは、児童が、よりよい演技づくりに向けて試行錯誤する中で、一人一人の意見の大切さを感じさせることに有効に働いたと考える。

<教具の工夫>

ホワイトボードを話し合いの場で活用した。出た意見をもとに、ホワイトボードに書き込んだり、修正をしたりすることで、意見を出した児童だけでなく、グループ全員が動きや演技の構成を視覚的に確認し、理解することができるのではないかと考えたからである。このホワイトボードの活用によって、全員が動きや演技の構成についての共通理解をすることや、その場で何度でも、書き直ししながら修正することができたために、グループの話し合いが活性化した。このことは、表5にある児童の感想からもうかがえる。

このことから、ホワイトボードの活用が、仲間と意見を出そうとしたり、受け入れようとしたりに有効に働いたと考える。

表5 児童の感想

今までとはちがって、演技をどうすればいいのかを書くホワイトボードに、今までは加えていなかったけど、技を加えてみました。そしたら、いいのができたから、どんどん工夫していきたいです。
ホワイトボードに書いたみたいに、本当にやってみました。「はじめ」は、よかったです、「なか」と「おわり」はやめました。「なか」で足があたったからです。なので「なか」は、集まるではなく、「首倒立」にしました。で「おわり」は、二人が補助倒立で二人が首倒立にしました。上手いきました。

<教師の働きかけ>

ここでは、教師の働きかけの有効性について、自分から意見を出すことに苦手意識をもっているA児の意識調査(図2)や感想の推移(表6)をもとに分析する。

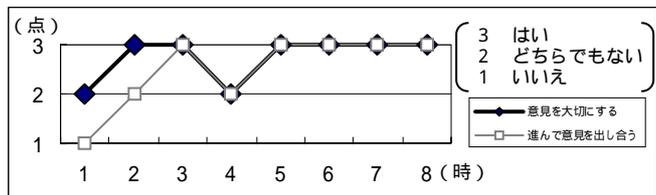


図2 「意見を出そうとしたり、受け入れようとしたりする」(A児)

表6 A児の感想の推移

(第3時) 朝、先生にそうだんして、みんなは意見を言えただ、私は言えずに2回目の話し合いで私も意見を言えました。私は、「2人でも4人でもできることをがんばって協力する。」と言いました。
(第4時) なかなか合わなくてみんなとできませんでした。ペアグループと協力してやって、3回目にやっとできたけど、これからもみんなと協力して楽しい体育していきたいと思いました。
(第5時) 最初は、なかなかそろわなくてできませんでした。だけど今日は、「みんなで回って、ハイ、ポーズ」じゃなくて、わたしは、「1、2、3、4、5、6、7、8」というふうにしようと、みんなや先生にそうだんしました。そしたら、「いいよ。」と言ってくれました。体育は、とても楽しいです。
(第6時) みんなと一緒に協力しているいろんな技をしました。一声運動で「がんばれ。」「あともう少しだよ。」ということ一声運動は大切だということが分かりました。
(第7時) まだ、リズムに合わないかもしれないけど、8時間目の体育はとても楽しみです。今まで、みんなと一緒に体育をしてきて、とても楽しかったです。
(第8時) 集団マットをしようとする時や話し合いに、先生がついてくださって、いろんなアドバイスをもらいました。楽しかったです。

A児の所属するグループは男女が対立し、意見がまとまらない傾向にあった。特に、第4時には、グループ内の対立が激しくなり、練習を十分に行うことができなかった。そこで、第5時では、話し合いの場面で、教師がグループに入り、児童一人一人の出した意見に対して、「いいアイデアだね。」「いいよ。試してごらん。」など、承認を意識した言葉かけを積極的に行った。教師が一人一人の意見を承認することによって、A児は自分が出した意見がグループや教師に認められるという経験をし、第5時の感想では、「『いいよ。』と言ってくれました。体育は、とても楽しいです。」という記述をしている。第6時以降も、A児の所属するグループは、一人一人の意見をまず認めるという雰囲気が次第にめばえてきた。

A児は、単元終了時の、集団マットの学習で「うれしさを楽しさを一番感じたことは何ですか」という問いに対して、「みんなで一緒に考えたり、意見を出し合ったりしたこと」と答えた。

このことから、グループでの話し合いの中で、一人一人の意見を聞いて認めるといった教師の言葉かけが、仲間と意見を出そうとしたり受け入れようとしていたりすることに、有効に働いたと考える。

イ 「仲間と励まし合い、教え合おうとする」視点について

仲間と励まし合い、教え合おうとすることができたかどうかを児童の意識調査の結果から分析する。

図3は、毎時間授業終了後に行った児童の意識調査のうち「グループの友達を補助したり、アドバイスしたりすることができましたか」「グループの友達をほめたり、励ましたりしましたか」の二つの項目を取り上げて、クラス全体の平均値をグラフ化したものである。まず、「グループの友達を補助したり、アドバイスしたりすることができましたか」の項目のグラフを見ると、第1時では「2.35」だったものが、第8時では、「2.97」となり、ほぼ全員が「できた」ことがうかがえる。「グループの友達をほめたり、励ましたりしましたか」の項目についても同様に、時間の経過とともに徐々にできてきていることがうかがえる。

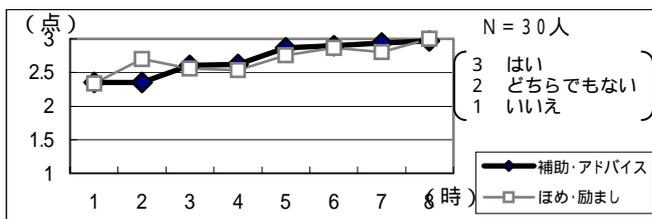


図3 「仲間と励まし合い、教え合おうとする」

そこで、このような結果が得られた理由を「場の設定」「教具の工夫」「教師の働きかけ」の三つの指導の手だてから考察する。

<場の設定>

ペアグループをつくり、互いの演技を見合う場を設定することにより、教え合いや励まし合いができるようにしようと考えた。その結果、各グループが

よりよい演技づくりに向けて、互いの「くちリズム」を伝え合うなど、協力する場面が見られるようになり、演技後には「どうだった?」「うまくできてた?」と演技のつながりや技の正確さについての評価を求める声も出てきた。また、「あのグループのようにやればいいんだ。」「そういう回り方もあったんだ。」など、ペアグループから学ぶことを意識した発言があったり、感想が見られたりした(表7)

表7 児童の感想

ペアグループで見合いました。とてもよい感想を言ってもらいました。息が合っているからこそこんなに美しい演技が生まれるんだと思いました。今日の体育は、とっても楽しかったです。
私は、ペアグループの演技をじっくり見て「後転は、そうすれば上手くできるのか」と思いながら見ていました。

このことから、「見合いの場」を設定したことが、仲間と励まし合い、教え合おうとすることに有効に働いたのではないかと考える。

<教具の工夫>

図4に示したような、「技のポイントカード」を全ての児童に配付することによって、運動過程における、どの場面でもどのような言葉をかけてあげられるのかということをも、具体的に理解できるようにした。

このことにより、それまで、運動を得意とする児童が運動を苦手とする児童へ教えるという一方だけの活動が見られがちであったが、運動を苦手とする児童からも「足を伸ばして。」「脇をしめて。」「手のひらは、上に向けて。」など、具体的な言葉によるアドバイスが行われるようになり、教え合いという活動が双方向に見られるようになった。

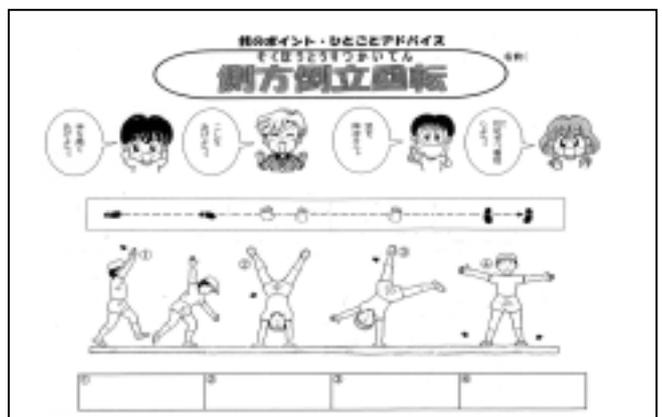


図4 「技のポイントカード」の例

<教師の働きかけ>

教師の働きかけの有効性について、運動を苦手とするB児の意識調査(図5)や感想の推移(表8)をもとにして考える。

第5時において、演技のリズムについていけなかったB児は、ペアグループから「Bさんだけがおくれていたよ。」「もう少し早く回って。」という指摘を受けた。このことが、B児のうまくできないのではないかという不安を、さらにつのらせることになってしまい、その結果、泣き出してしまった。そこで、すぐにペアグループを集め、B児の頑張りについても認めていくように「B児のよさも見つけてあげてね。」という言葉かけを行った。

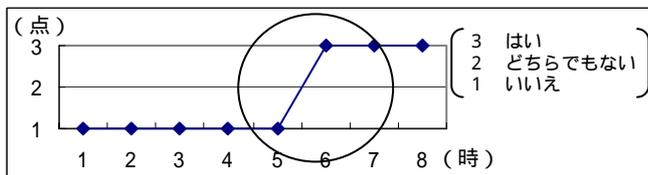


図5 「友達とお互いに教えたり、助けたりしましたか」(B児)

表8 運動に苦手意識をもっているB児の感想の推移

(第2時)	ペアでWさんと楽しかったです。
(第3時)	F君は、速くて合わなくて、いろいろきめても合いませんでした。Wさんが帰ってきて、3人だからうまくいきました。よかったです。分かったことは、協力しないとうまくいかなかったことです。
(第4時)	最初は合わなかったけど、声を入れたら合いました。楽しかったです。アシストはF君です。理由は「練習しよう」とできないときに言ってくれたからです。
(第5時)	ペアの班に見てもらおうとき「Bさんは、おくれたりして、できてないよ。」と言われて泣いてしまいました。その時、Wさんがなくさめてくれました。
(第6時)	側転の練習をしました。前は、できなかったけど、ゴムをもってくれているWさん・Iさんのアドバイスのおかげでできました。できた時も「すごいじゃん、できたじゃん」と言ってくれました。うれしかったです。8班の人に見てもらおうとき成功したと思います。
(第7時)	グループでホワイトボードをみて話し合ったことを練習しました。一人ずつやって先生もアドバイスをくれました。Wさんも「いいよ、その調子」と言ってくれました。兄弟班も「よかったよ」とか「いいことばかりでした。私も、いいところを言ってあげたいです。」
(第8時)	いよいよかけ声です。「7班!」はWさん、「協力」私とWさん、「努力」I君、「がんばるぞ!!」が全員。そのかけ声で気合が入りました。発表が上手いって「成功した。」と思って「ハイタッチ」を思いっきりしました。教えてもらった技をずっと使っていきたいです。

しかし、第5時のB児の「友達とお互いに教えたり、助けたりしましたか」についての意識調査の結果は「1」であった。教師がB児の不安を取り除こうと意図する言葉かけをしたにもかかわらず、この

ような結果になったのは、教師の言葉かけに具体性がなく、抽象的であったからだと考えた。

そこで、第6時の授業の始めに、「一声運動『肯定的なかかわり方のポイントを具体的な表現で提示し、学習カードに記載したり、黒板に掲示したりして学級全体に意識付けられるようにしながら、積極的に友達に声をかけることを目標とした運動(表9)』」の内容を学級全体で振り返ることにした。その中でも、特に「友達がやる気をおこすような言葉をかけよう」という内容について確認し合った。さらに、教師も自らグループを回りながら「しっかりポーズを決めて。」「すばらしいよ。」「支持しているからやってみよう。」「もうできるよ。」など、技能に関する助言と運動結果に対する賞賛や自信をもたせるような具体的な言葉かけを積極的に行った。

B児は、第6時の感想にもあるように、「アドバイスのおかげでできました。」「すごいじゃん、できたじゃん。」などの、言葉かけをしてもらい、そのことを「うれしかったです。」と表現している。また、意識調査の結果も「3」になっている。さらに、第7時の感想からは、「いいよ、その調子。」「よかったよ。」という言葉をかけてもらっただけでなく、「私も、いいところを言ってあげたい。」という自分から進んで仲間とのかかわりをもとうとする内容の記述も見られるようになった。第8時では、全員でかけ声をかけることによって、喜びを表現するハイタッチをするなど、B児の運動に対する積極性がうかがえた。

表9 「一声運動」の内容

『一声運動!!開始』
友だちがやる気をおこすような言葉をかけよう。
「すごい!」「ナイス!」「うまい」「きれい」
「いいよ」「その調子」「平気平気」「ドンマイ」
男女関係なくみんなで助け合おう。
「2人組で、むりなときは3人や4人でほじょし合おう」
成功したときは、喜びを表そう。
「ハイタッチ」「ガッツポーズ」「拍手」「声かけ」「握手」

以上のことから、教師が運動結果に対する賞賛や技能に関する助言などを積極的かつ具体的に行ったことや子ども同士で「やる気をおこすような言葉かけをしていこう」という「一声運動」を励行したことや、どんな言葉を言えばよいのかを具体的に示し、

紹介したことが、教え合ったり、励まし合ったりする言葉かけの活性化に有効に働いたと考える。

ウ 「仲間のよさを認め合おうとする」視点について

仲間のよさを認め合おうとすることできたかどうかを児童の意識調査の結果から分析する。

図6は、毎時間授業終了後に行った児童の意識調査のうち「友達によさや頑張りを見つけることができましたか」の項目を取り上げて、クラス全体の平均値をグラフ化したものである。このグラフを見ると、第1時では「2.63」だったものが、第8時では、「2.97」となり、ほぼ全員が「できた」ことがうかがえる。

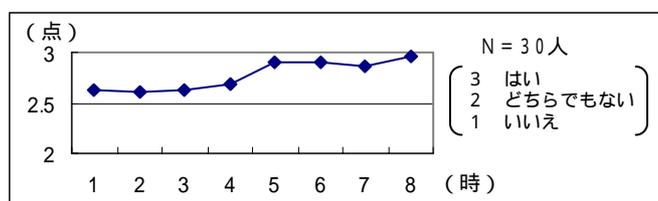


図6 「友達によさや頑張りを見つけることができましたか」

そこで、このような結果が得られた理由を「場の設定」「教具の工夫」「教師の働きかけ」の三つの指導の手だてから考察する。

<場の設定>

「ナイスファイト」(意欲面)「ナイスアシスト」(仲間とのかかわり)などの観点から学習カードに記入し、全体で賞賛し合うことのできる、「振り返りの場」を設定した。

表10 体育日記

今日の目標は、応援する、アドバイスをすることでした。Tさんは、足うちが5回できていました。ぼくも、Tさんのように上手になりたいです。最後のナイスファイト、ナイスアシストでSくんがぼくのことを言ってくれたのでうれしかったです。今日の体育は、楽しかったです。なぜなら、ほめられたからです。ぼくは、骨折して体育ができなかったけど、声だけでも、がんばろうと思って、がんばりました。がんばって、がんばってがんばりまくりました。そしたら、5班で一番かつやくしたとナイスアシストで言ってもらえたから、うれしかったです。

このことにより、次第に認め合う雰囲気生まれ、発表に対して大きな拍手も自然に出るようになってきた。また、表10の体育日記のように、全体の場で

仲間に認められることによって喜びを感じ、その結果、運動に積極的に取り組む児童も出てきた。

このことから、この場の設定が、認められることのすばらしさ、よさや頑張りを伝え合うことの大切さをクラス全体で実感することにつながり、仲間のよさを認め合うことに有効に働いたと考える。

<教具の工夫>

毎時間グループの仲間やペアグループのよかった点について書き込むことができるように、学習カードを工夫した。学習カードに記入したことを、授業終了後に教師が見ることで、授業中に見落としていた児童のよさや頑張りを見ることができ、次の時間に、賞賛することができたり、頑張り进行评估したりすることに役立った。

<教師の働きかけ>

毎時間終了時に、グループの仲間やペアグループのよかった点について発表させていたが、第3時までは、児童の発言が非常に少なかった。また、発言内容も、「後転ができていた。」「側転ができていた。」という、「できた」ことについてであった。

そこで、「できたことだけでなく、できなくても一生懸命やってきたことが大切なんだよ。」という助言を行った。さらに、第4時においては、課題に対し積極的に取り組んでいる児童や、仲間に対しての助言や補助、賞賛や励ましなどの発言や行動に対して、教師が賞賛する言葉かけをより積極的に行い、全体にも紹介していった。

すると、第5時には、挙手も多くなり、発言も「しっかり声を出して、リズムをとってくれたのでうれしかったです。」「ペアグループの人が、難しい技に何度も挑戦していました。」「困っているとき、いろんなアドバイスをもらって、助かった。」「できたとき、『よかったね。』と言ってもらって、うれしかったです。」など、仲間のよさを見つけたことや仲間から頑張っていることをほめられた喜びについてなど、具体的に記述した内容になってきた。

このことから、技ができた、できないということにかかわらず、教師が運動に取り組む前向きな姿勢を取り上げて、全体の場で賞賛したことが、児童の認め合いを活性化させることに有効だったと考える。

エ 運動への意欲の高まりについて

単元前と単元終了後に行ったアンケート調査の結果(図7)と児童の感想(表11)から、児童の運動への意欲の高まりを分析・考察する。

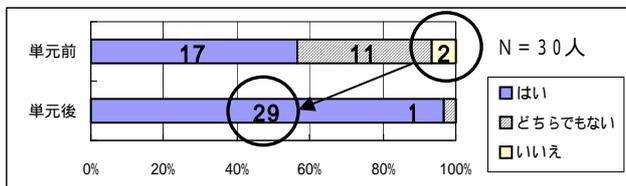


図7 「自分で進んで運動をする」

表11 運動が苦手な児童の感想(単元終了後)

(B児) 前までの体育は、発表とかは、なかったけど、先生の体育は、班で発表や話し合いがあって、とても楽しくなりました。できないときにはげましてくれる友達がいるのがうれしいです。(中略)発表が終わって「成功した。」と心の中で思いました。よかったです。
(C児) 私は、今までできなかった後転が、あと少しでできるようにになりました。班のアシストと先生の協力で、何とか回って立ち上がれるようになりました。回ったとき、「つま先が、もうちょっと早くマットについたら、できるよ。」と友達に言われて、練習をしています。今、習ってきたことをもとに、がんばろうと思います。がんばって練習したらできるようになって、新しい技にちょうせんしていきたいです。

「自分で進んで運動をしましたか」の項目のグラフにおいて、単元前では、運動を苦手とする2名の児童(B児、C児)が「いいえ」と答え、消極的な態度を示していた。しかし、単元後には、2名とも「はい」と答えており、学習に対する姿勢の変容が見られた(図7)。この2名の変容を単元終了後の感想(表11)から考察する。

まず、B児については、仲間と話し合ったり励まされたりすることで、運動することの楽しさや喜びを実感し、「できた」という達成感を味わっていることがうかがえる。次に、C児については、友達の具体的なアドバイスにより、できなかった技がもう少しでできそうだという手ごたえを感じ、次の技への挑戦意欲につながっている姿がうかがえる。

上記のことから、運動を苦手とする児童にとっては、仲間とのかかわりを深めることを通して運動への意欲を高めることができたのではないかと考える。

成果と課題

1 成果

今回の研究を通して、教師の言葉かけが仲間とのかかわりを深めることに、重要な関係があることが分かった。そこで、どのような言葉かけが必要であるのかを六つの項目に分類し、教師の言葉かけの例として表にまとめた(表12)。

今後は、この表をもとに、いつどのような場面で効果的に働くのかを考えていきたい。

表12 教師の言葉かけの例

項目	教師の言葉かけ
目標の提示	10回やってみよう・1回でやってみよう・みんなで合わせよう・同時にやってみよう・順番にやってみよう
賞賛	すばらしい・上手だよ・きれいだよ・かっこいいよ・完璧だ・助け合っているね・よく声が出ているよ・びったりだよ・ナイス
承認	いいよ・今のオッケー・いいね・今の感じ・そう、そう・その感じだよ・合ってきたよ・そろってきたよ
技能向上の助言	目線は前・背中を丸めて・足は腰より高く・ポーズも決めよう・リズムに合わせて・タイミングを合わせて・リズムをとって
自信をもたせる助言	ちゃんとできているよ・もういけるよ・それで十分だよ・みんなできているよ・チームワークがいいね
励まし・援助	がんばれ・見ているからやってみよう・支持してあげるよ・リズムをとってみよう

運動を苦手とする児童にとって、仲間とともに課題に挑戦したり表現したりすることで、今もっている力でさらに豊かな楽しさを味わうことができたことや練習場面や発表会などを通して、自分の技が集団演技の中で生かされると実感できたことが、運動への意欲の高まりにつながったと考える。

2 課題

今回の研究では、運動の苦手な児童については、成果を確認することができたが、運動の得意な児童にとって、仲間とのかかわりを深めることが運動への意欲の高まりにつながっていたかどうかについては、分析が不十分であった。今後は、運動の得意な児童についても運動への意欲の高まりにつながっていくのかについて追究していきたい。

参考文献

市村操一『体育授業の心理学』 大修館書店

2002

高橋健夫『体育授業を観察評価する』 明和書店 2003

